【ラグビー】興奮、感動…44日間の楕円球の祭典閉幕。WR会長「日本大会はラグビーの印象を劇的に変えた」

11/3(日) 13:53配信

表彰式後、観客にあいさつするチャンピオンチームの南アフリカ代表（Photo: Getty Images）

日本中に感動と希望をもたらし、こんなすばらしいスポーツがあったのかと楽しませ、世界の多くの人々を熱くしたラグビーワールドカップ2019日本大会が終わった。台風により3試合を中止せざるを得なかったが、ボランティアを含めたすべての大会関係者、ファンの応援、そして選手・チームの奮闘などで盛り上がり、44日間の楕円球の祭典は無事に幕を閉じた。

今大会期間を通じての観客動員数は延べ170万4443人、1試合の平均観客数は3万7877人だった。

プール戦での最多観客動員は横浜国際総合競技場でおこなわれた日本対スコットランド戦の6万7666人。ノックアウトステージでの最多観客動員は、決勝、イングランド対南アフリカ戦の7万103人で、これは同会場の歴代最多動員数を記録した。

チケットの販売数は、最終的に約185万3000枚を販売可能席とし、約184万枚（販売率は約99．3%：中止の3試合を含む）となった。

「ラグビーワールドカップ2019は、最高の大会のひとつであり、私たちが愛するラグビーに新たな観客をもたらしたという点で非常に画期的でした。全世界のラグビーファンを代表して、このようなすばらしく、謙虚で、歴史的なホスト国であった日本と日本人に、心の底から感謝したいと思います」

ワールドラグビーのビル・ボーモント会長が大会を総括した。

優勝した南アフリカ代表については、「傑出したラグビーを続け、ウェブ・エリス・カップを掲げるにふさわしいチーム」と称賛。アイルランド代表、スコットランド代表という強豪を破る快進撃で初のベスト8入りを果たした日本代表については、「日本代表の驚くべきパフォーマンスも、間違いなく大会の最も記憶に残る瞬間でした」と振り返る。

台風という非常に困難な災害に対する日本の対応については、「このすばらしい国の人々の回復力と復興への決意の表れであると感じます。我々は、この悲劇的な出来事の影響を受けた全ての人々について思い続けています」と語った。

そして最後にこう結ぶ。
「ラグビーワールドカップ2019が記憶に残る大会であるために、全力を尽くした全20チームと関係者の皆様に感謝したいと思います。日本大会はさまざまな意味で記録を破り、ラグビーの印象を劇的に変えたのです」

大会組織委員会の嶋津昭事務総長は、「数々の熱戦、名勝負は、世界中から注目を集め、日本中を夢中にさせました。ラグビーワールドカップ2019日本大会は、多くの人にとって永く記憶されるであろう、すばらしい大会となりました。この大会を本当に特別なものにしていただいた全ての選手、海外そして日本のファンの皆様にあらためて感謝を申し上げます」とコメントした。

今大会の盛り上がりは、ラグビーのゲームの魅力とともに、選手の振る舞いなど、ラグビーの持つ「品位」「情熱」「結束」「規律」「尊重」という5つの価値が日本人の心に響いたのではないかと嶋津氏は見る。
「この大会が多くの日本人、アジアの人々にとってラグビーへの理解や関心を深めることにつながり、今後の世界的なラグビーの普及発展に結びつきますことをお祈りいたします。私ども組織委員会は、2023年フランス大会の組織委員会に向けて、しっかりとバトンをつないでまいります」

ラグビーW杯の熱狂なぜ　日本人が思い出したこと

11/3(日) 13:09配信

スコットランドに勝利して8強入りを決め、笑顔で記念写真に納まる日本代表の選手たち。ワールドカップ期間中、日本各地が熱気に包まれた（撮影・中村太一）

桜のジャージーで街があふれかえった日本列島。担当記者として、ここまでの盛り上がりは想像していなかった。南アフリカの優勝で幕を閉じたラグビーワールドカップ（W杯）日本大会の人気に火を付けたのは、史上初の8強入りを果たした日本だ。新たな「国民的行事」となったラグビーW杯。なぜここまでファンを増やしたのか。

【写真】試合後、スタンドにお辞儀するニュージーランド代表

大会前に熱っぽく語っていたリーチ・マイケル主将の言葉が頭に浮かぶ。「外国人も日本人も一緒になって結果を出す。ダイバーシティー（多様性）がすごいチームと思ってほしい。これからの日本（社会）はどんどんグローバルになる。いろいろ感じてほしい」

日本のメンバー31人のうち15人が海外6カ国の出身・国籍。父が元韓国代表の具智元選手はスクラムで雄たけびを上げてチームを鼓舞し、南アフリカ出身のピーター・ラブスカフニ選手はローマ字で覚えた君が代を歌い、母国に立ち向かった。

海外出身勢の多さを批判する声は広がらなかった。人気競技に比べても厳しい待遇の中、あらゆる犠牲のもとで過酷な練習に耐え、チームのために大柄な選手へのタックルを繰り返す「ワンチーム」。チームや競技の普及に対する献身的な姿が報道を通して伝わったからだろう。一丸となり困難を乗り切る日本の戦いぶりは、人口減で外国人労働者が増えるであろうこれからの日本社会の縮図であり、理想像だ。排他的な空気が漂い始めた社会で、絆やつながりといった日本人が大切にしてきた価値観を見つめ直し、国籍を超えて分かり合える可能性を感じ取ったからこそ共感が広がった。

試合が終われば敵味方は関係ないというノーサイドの精神。試合後に花道をつくってたたえ合い、日本文化を尊重した外国チームの選手同士が一列になって観客席にお辞儀もした。ラグビー憲章にうたわれた「品位、情熱、結束、規律、尊重」を具現化する姿に、忘れていた何かを思い出して感動した人も多かったはずだ。スポーツの枠を超え、心にレガシー（遺産）を残した歴史的大会だった。（大窪正一）